

# チェコ語話者に日本語を教える際の問題点

ブラハ・カレル大学 岩澤 和宏

## 0. はじめに

本稿では、チェコ語話者に日本語を教える際の諸問題について論じる。ブラハ・カレル大学で客員講師として日本学専攻の学生に3年余り日本語を教えた経験から、チェコ語話者にとって日本語のこういった面が習得しにくいのか、何が難しいのかについて、実証的に考察する。それには当然、チェコ語と日本語の対照的な研究が必要になるわけだが、本稿では日本語を教える際の問題点に絞って論じたいと思う。

チェコ語話者が難しいと感じることの多くは、恐らく他のスラブ語話者にとっても共通の問題だろうし、またいくつかはヨーロッパ言語を母語とする人々にとっての共通の問題かもしれない。或は、学習者の母語に関わりなく問題となることもあろう。従って、本稿で取り挙げることの全てが、チェコ語話者だけの問題という訳ではない。

尚、本稿で言う「チェコ語話者」とは、チェコ語を母語とし、日常主にチェコ語を話している者で、チェコ語と同等にできる言語を他に持たない者のことである。

## 1. チェコ語話者が話す日本語の音声について

チェコ語話者が話す日本語を、日本人が聞き間違える、或は聞き取れないということは比較的少ない。

チェコ語では日本語と同じように、有声音と無声音は対立し、有気音と無気音は対立しない。従って、日本語の所謂「清音」「濁音」「半濁音」の区別に問題は少ない。

またチェコ語には、例えば“a”(ア)と“á”(アー)の区別があり、長音の発音にも問題は比較的少ない。

チェコ語話者が話す日本語の音声には特に大きな問題がなさそうなので、教師の側もまた学習者の側も問題を見落としがちであるが、より良い日本語の音声のために注意すべきことを以下に述べる。

### 1.1 アクセントについて

日本語は「高さアクセント」(pitch accent)であるが、チェコ語は「強さアクセント」(stress accent)であり、その位置はいつも単語の最初の音節にある。

「高さアクセント」自体は容易に習得されるが、チェコ語話者が未知の日本語の単語に遭遇した場合、それをすべて起伏式の頭高型に発音しがちである。特に、2音節の単語は全て頭高型に発音してしまう傾向がある。それは、発音が簡単だからと言うよりも、そのほうがチェコ語話者にとって「自然に」響くためだと思われる。

ひとつひとつの単語のアクセントはそれぞれ個別に覚えなければならないので、アクセントの間違ひに関して特効薬はないのだが、なるべく早い時期に日本語のアクセントにはいくつかの型があることを教授しておくことが望ましい。少なくとも、「ヒロシマ」「ナガサキ」(この二つの都市名はチェコでも充分知られている)「ナゴヤ」はそれぞれ違う

アクセントであることを示しておくが良い。

## 1.2 促音について

チェコ語話者にとって促音自体の習得はさほど難しくはない。問題は、本来促音ではないところを促音で発音してしまうことである。特に、2音節の「～た」という語が、誤って「～った」と発音されやすい。「来た」が「キッタ」、「肩」が「カッタ」という具合である。

これに1.1で述べたアクセントの誤りが加わると、「歌」が「打った」になったり、「北」が「切った」になったりする。

## 1.3 撥音について

撥音は「ん」と表記されるが、いつも同じ音で発音される訳ではない。例えば、「サンボン」(3本)「サンニン」(3人)「サンカイ」(3回)「サン」(3)の下線部は「ン」と表記されるが、すべて違う音である。他にも「ン」の異音はいくつかある。

チェコ語話者の日本語学習者には、中級になっても「本を読む」が「本の読む」になったり、「3千円で買った」が「3千年で買った」になったりすることがしばしばあるが、これは撥音がきちんと習得されていないために起こる誤りである。

## 1.4 外来語の発音について

日本語が外国語から言葉を取り入れる際、特徴的なことのひとつは子音の後に母音を付けることである。例えば、“hotel”は「ホテル(“hoteru”)」である。これ自体はチェコ語話者にはさほど違和感がない。

チェコ語では、例えば「ホテルプラハ」は“Hotel\_Praha”、「ホテルへ(行く)」は“(jít) do hotelu”と言い、日本語のように母音を付け足すことはチェコ語にもある。日本語の「ホテル」もきちんと母音を補ったうえで発音される。

しかし、この法則を誤用し、「ワイン」が「ワイヌ」に、「サンドイッチ」が「サンドイッチェ」になったりすることもしばしばある。

「ワイン」が「ワイヌ」になるのは、1.3で述べた撥音の習得が難しいということとも関係がある。

## 1.5 その他の注意すべき発音について

### 1.5.1 ラ行の発音について

チェコ語の“R”の音は、日本語でも特殊な場合に現れる巻き舌のラ行の音に近く、英語の“R”とは違う。その影響で、チェコ語話者の発音する日本語のラ行は、巻き舌になりやすい。特に語頭のラ行がよく巻き舌になる。どうしても矯正できず、あまりに耳障りな場合は、チェコ語の“L”か英語の“R”で代用する手もある。

### 1.5.2 「ひ」の発音について

それ程耳障りではないが、ハ行が正確に発音出来ないチェコ語話者は少なくない。特に、「ひ」の音がチェコ語の“chi”になりやすい(チェコ語の“ch”は、ドイツ語の“Bach”の“ch”に似ている)。その場合、「ひと」(人)が「ふいと」のように聞こえてしまう。

### 1.5.3 「し」の発音について

チェコ語話者の発音する「し」は、必要以上に強く発音される傾向がある。

チェコ語の“ši”は、日本語の「し」と比べると調音点が少し奥にあり、唇を丸めて発音される。しかも息が強いので、チェコ語の“ši”で日本語の「し」を発音すると、摩擦の音

が耳障りになることがある。

## 2. チェコ語話者が間違えやすい日本語の語彙・文法事項について

チェコ語話者に日本語の文法が難しいかどうか尋ねると、たいていあまり難しくないと答える。それは彼ら自身が文法の複雑なチェコ語を話しているということもあるが、それと共に彼らが自分の文法的間違いに気がつかなかつたり、或は文法的間違いをそれ程重要視しないことにもよると思う。劇作家のハベル大統領でさえも時折チェコ語の文法を間違えるということだから、チェコ語話者は日本人より文法的誤りに対して寛容度が大きいかもしれない。

### 2.1 「行く」と「来る」について

「行く」と「来る」は、比較的早い時期に導入される動詞である。実際上の必要からもよく使われる動詞であるのだが、「行きました」と「来ました」、また「行った」と「いた(ーいる)」の発音が似ていることから、動詞の使い方に混同を生じることがある。

#### 2.1.1 「行く」と「来る」の使い分け

我々日本人が英語の"go"と"come"の使い分けをよく間違えるのと同じように、チェコ語話者は「行く」と「来る」の使い分けをよく間違える。

初級の最初の段階で、

「きのう学校に来ましたか。」

という問いに対して、

\*「はい、行きました。」(\*は誤りを示す。以下同じ。)

と答える誤りが目立つ。それは、先に述べたように「来ました」と「行きました」の発音が似ていることもあるが、それ以上に「行く」と「来る」の使い分けが難しいのだ。

日本語では、話し手側や現在位置から遠ざかる移動動作を「行く」、近づく移動動作を「来る」と表現する。チェコ語では、「行く」に相当する"jít"や"jet"などと、「来る」に相当する"přijít"や"přijet"などの使い分けは、「行く」と「来る」の使い分けと同じではない。また、英語の"go"と"come"の使い分けとも違う。

例えばバス停でバスを待っていて、遠くからこちらに近付いてくるバスが見えた時、日本語では

「バスが来ました。」

英語では、

"Bus is coming."

と言うが、チェコ語では

"Jede mi autobus." (「バスが私へ 行きます / 行っています。)」

と言う。

「彼は毎年ブラハに来ます。」

をチェコ語では、

"Jezdí do Prahy každý rok." (「彼は毎年ブラハに行きます。)」

とも言うし、

"Přijíždí do Prahy každý rok." (「彼は毎年ブラハに来ます。)」

とも言う。

直接法による教授法ではよく絵教材が使われるが、チェコ語話者に対しては、絵教材だけに頼って「行く」と「来る」の概念を正しく導入することは不可能である。

### 2.1.2 「行く」時間について

「私は明日9時に学校へ行きます。」

この文の意味は、通常「私」が「明日9時に」既に学校に着いていると解釈される。ところが、チェコ語で

" Zítřa v 9 hodin jdu do školy." (「明日9時に私は学校へ行きます。」)

と言った場合、9時は家(またはホテル、その他)を出る時間である。どのような文脈を付けようと、9時に学校に着く意味にはならない。これは主語の人称やテンスには無関係である。

ちなみに、9時に学校に着くことを表す場合チェコ語では

" Zítřa v 9 hodin budu ve škole." (「明日9時に私は学校にいます。」)

と言わなければならない。

「～時に来ます」では日本語とチェコ語で来る時間の解釈の違いはない。

「～時に行きます」をチェコ語話者に導入・練習する際には、形だけではなくその意味にも注意しなければ、思わぬところで誤解を生じることになってしまう。

### 2.1.3 「行く/来る」と「いる」について

2.1.1 で挙げた文「きのう学校に来ましたか。」は、チェコ語話者にとって日本語学習の初期の段階では奇異に聞こえるかもしれない。チェコ語では「～時に」とか「地下鉄で」などを伴わないで「きのう学校に来ましたか」と言うことはない。

チェコ語では

" Byl jste včera ve škole?" (「きのう学校にいましたか。」)

と言う。

「きのう銀行に行きました。」

をチェコ語で、

" Včera jsem šel do banky." (「きのう私は銀行に行きました。」)

と言わないことはないが、

" Včera jsem byl v bance." (「きのう私は銀行にいました。」)

の方が自然なチェコ語である。

「アメリカに行ったことがありますか。」

をチェコ語で、

" Už jste byl v Americe?" (「もうアメリカにいましたか。」)

と言い、「行く」を使わず「いる」を使う。

「アメリカに行ったことがあります。」と言うべきところを「アメリカにいた (←いる) ことがあります」と言い、更に「いた (←いる)」に誤って促音を加えたお陰で、結果として「行ったことが……」と聞こえることがある。

「母はブラハにイックことがあります。」と学生がブラハで言った場合、発音の誤りなのか、「行く」と「来る」の使い分けの間違いなのか、「行く」と「いる」の問題なのか、よく注意しなければならない。

## 2.2 時の表現

### 2.2.1 「～まで」と「～までに」について

日本語では「～まで」と「～までに」は、はっきりと区別されている。時を表す言葉として使われた場合、「～まで」の後ろの文には継続的な動作や状態が来、「～までに」の後ろの文には瞬間的な出来事や動作が来る。

ところがチェコ語では、「まで」と「までに」のような明確な区別はない。

「木曜日までこの本を貸して下さい。」

" Půjčte mi, prosím, tuto knihu do čtvrtka."

「木曜日までにこの本を返して下さい。」

" Vraťte mi, prosím, tuto knihu do čtvrtka."

チェコ語話者は英語を話してもこの二つを混同するようで、流暢な英語を操る英語学科の学生までもが

\* " I have to give this paper until Thursday."

(チェコ語では " Musím odevzdat tento papír do čtvrtka.")

のように間違えるのだから、相当重症である。

### 2.2.2 「～あいだ」と「～あいだに」について

2.2.1 で述べた「～まで」と「～までに」と同じように、チェコ語では「～あいだ」と「～あいだに」を区別しない。

「子供が寝ているあいだ、私は本を読んでいた。」

" Když dítě spalo, četl jsem knihu."

「子供が寝ているあいだに、私は料理を作った。」

" Když dítě spalo, uvařil jsem jídlo."

尚、上のチェコ語にある"kdýž" (英語の"when"に相当)の他に、ふたつの行為を比較したりコントラストをつける場合に、"zatímco" (英語の"while" "whereas"に相当)が使われる場合もあるが、"zatímco"も日本語では「～あいだ」と「～あいだに」の両方が対応する。

### 2.2.3 「～時」と「て形」について

日本語で、例えば「家に帰った時」と言えば、家に着いた瞬間、或はその直後を意味する。ところが、「～時」に当たるチェコ語の"kdýž" (英語の"when"に相当)は、その幅がかなり広い。

「家に帰りました。」と「(家で)寝ました。」をひとつの文にするなら、日本語では「家に帰って、寝ました。」となる。ところが、チェコ語では、少々口語的ではあるが、

" Když jsem přišel domů, šel jsem spát." (「家に帰った時、寝ました。)」

とすることも可能である。そのため、

\* 「きのう家に帰った時、ご飯を食べました。」

\* 「きのう家に帰った時、朝までテレビを見ました。」

のような、おかしい文を作ってしまう。これらは当然、

「きのう家に帰って(から)、ご飯を食べました。」

「きのう家に帰って、朝までテレビを見ました。」

と言うべきだが、ここには「～時」と"kdýž"の違いとともに、「て形」の問題もある。

「て形」の意味は前後の文脈により色々に解釈されるが、「て形」自身は動作をつなぐ

だけである。問題は、「て形」の解釈の方法ではなく、「て形」で文をつなぐことができるのかどうかということである。

上の例では、「家に帰る」動作が先にあり、その後の動作を文の後に続けるのだから「家に帰って～」とつなぐことができる。

では、「会議はプラハ4区で行われました。」と「私はそこへバスで行きました。」という二つの文をつなぐ場合はどうか。チェコ語ではコンマか、或は"a"（英語の"and"に相当）を使って、自然にひとつの文にすることができる。

" Kongres se konal v Praze 4, jel jsem tam autobusem."

（「会議はプラハ4区で行われて、私はそこへバスで行きました。」）

" Kongres se konal v Praze 4 a jel jsem tam autobusem."

（「会議はプラハ4区で行われて、そして私はそこへバスで行きました。」）

ところが日本語の場合、「て形」を使って二つの文をつなぐと、

??「会議はプラハ4区で行われて、私はそこへバスで行きました。」

となり、不自然な文になってしまう。

「バスで行った」時点で、まだ「会議」が始まっていなかったのなら、

「会議はプラハ4区で行われることになっていて、私はそこへバスで行きました。」

とし、既に「会議」が始まっていたのなら

「会議はプラハ4区で行われていて、私はそこへバスで行きました。」

としなければならない。

これらはチェコ語で考えれば自然な文が、日本語の中では不自然な文、或は意味をなさない文になってしまう例である。

「～時」や「て形」については、正しい使い方やその解釈を教えるだけではなく、それらが使えない場合や不自然になってしまう場合についても、注意を喚起しなければならない。

### 2.3 「ても」と「のに」について

日本語で逆接を表すものは、「ても」と「のに」がある。そして、「ても」が逆接条件を表す場合にも、既定条件と仮定条件とがある。

「ても」が逆接の既定条件を表す場合、それを「のに」で言い換えても文が成立する場合がある。

「学生が文法を間違えても、先生は訂正しませんでした。」

「学生が文法を間違えたのに、先生は訂正しませんでした。」

「のに」には、意外とか不服といったニュアンスが含まれるので、上の二つが同義であるとは言えないが、ともかく文としては成立する。

「ても」が逆接の仮定条件を表す場合には、それを「のに」で言い換えてしまうと文が成立しない。

\*「明日いい天気なのに、彼はどこへも行かない。」

\*「少しくらい文法を間違えるのに、かまいません。」

チェコ語話者に多く見られるこのような間違いは、「ても」と「のに」がチェコ語では共に"i když"が使われることによるものと思われる。

「今日はいい天気なのに、彼はどこにも行かない。」

" I když je dnes hezké počasí, nikam nepůjde."

「明日いい天気でも、彼はどこにも行かない。」

" I když bude zítra hezké počasí, nikam nepůjde."

「私はたくさん文法を間違えたのに、先生はひとつも訂正しませんでした。」

" I když jsem udělal hodně gramatických chyb, učitel nic neopravil."

「少しくらい文法を間違えても、かまいません。」

" I když uděláte malou gramatickou chybu, nebude to vadit."

当然、チェコ語話者は「のに」を使うべきところで「ても」を使ってしまうことも多いのだが、文が成立してしまう場合には、それを見つけにくい。

「手伝ってあげても、彼はお礼も言わなかった。」

( " I když jsem mu pomohl, nepoděkoval." )

この文の発話者の意図は、

「手伝ってあげたのに、彼はお礼も言わなかった。」

ではないかと推測できる。

\* 「明日試験があっても、私は何も勉強していない。」

( " I když mám zítra zkoušku, neučil jsem se." )

のように、「ても」を使ったのでは文が成立しない場合には、はっきりと「ても」と「のに」の混同だと判断できる。

#### 2.4 「まだ」と「もう」について

多くの場合、「まだ」にはチェコ語の"ještě" が対応し、「もう」には"už"が対応する。チェコ語話者が日本語を学習する際、日本語の訳を和英辞典に頼ることが多いが、「まだ」の英訳は"yet" や"still" など、「もう」の英訳は"already" "yet" "now" "any more" などとなっていて、かえって分かりにくい。チェコ語話者にとって、「まだ」と「もう」の習得は、母語で考えればそれ程難しいものではない。

「父はまだ寝ています。」 " Můj otec ještě spí."

「父はもう家を出ました。」 " Můj otec už odešel z domu."

ただし、現在の状態に何かを加えることを表す「もう」は、「už」ではない。

「ビールをもう一杯ください。」 " Ještě jedno pivo, prosím."

全て「まだ」が"ještě" に、「もう」には"už"が対応するものと安易に考えると、失敗する。

また、

「いいえ、まだです。」 ( "Ne, ještě ne." )

とは言えるが、

\* 「はい、もうです。」 ( "Ano, už." )

とは言えない点も、「もう」と"už"が異なる点である。

### 3. チェコ語話者が戸惑う日本人の言語行動について

日本語の音声も文法も何も間違っていないのに、チェコ語話者の話す日本語に違和感を持つことは少なくない。それはひとつには、日本人とチェコ人の言語行動の違いによるところもあろうかと思う。

日本人同士が日本語で話す場合、夫婦間であれ恋人同士であれ、「愛している」とか「好きだ」という言葉はあまり口にしない。少なくともチェコ語話者がチェコ語で話す場合ほどには言葉にしない。チェコ語では夫婦間や恋人同士は勿論、同性の友人間でも、日本語よりは頻繁に感情を伝えあう。

特殊な状況での発話であるが故に教室で教わることも少ないためと思われるが、チェコ語話者の日本語での感情表現は、日本人の言語行動の「文法」から外れてしまうことも少なくない。これを日本的な表現方法に矯正すべきかどうかは別問題だが、少なくとも日本人が日本人の言語行動の「文法」に則って感情を伝えようとした場合、それが理解できなければコミュニケーションに支障を来す。

逆に日本人がはっきりと言葉にし、しかもそれを繰り返して言うのは、お礼と謝罪である。日本人は、本当にその気持ちがある場合、お礼と謝罪は何度も繰り返して口にしなければ気が済まない。それに対してチェコ語では、お礼も謝罪も一度口にすればそれで充分と考えられているようだ。勿論程度によりけりだが、謝罪は自分の非に対する償いの話をした後という場合もある。

チェコ語話者が日本語でお礼や謝罪の言葉を口にした場合、ひどく淡泊なものになってしまうことが多い。或はその逆に、日本語の言語行動の「文法」を知識として身につけたために、不自然にしつこくなってしまうこともある。

これらは、特に間違いだという訳ではない。しかし、日本人とのスムーズなコミュニケーションという点では、日本人の言語行動の「文法」を知っておくことも大切なことであろうと思われる。

#### 4. おわりに

本稿では、日本語を教える際に問題になる点の中で、特にチェコ語話者に特徴的と思われる問題について論じてきた。日本語とチェコ語の対照研究が進めば、更に興味深い問題点やその対策も論じられることだろうと思う。

現在チェコでは、日本語を勉強する前に少なくとも二つ以上の外国語を勉強しているのが普通である。従って、日本語学習者は既に学習した言語の影響を受け、またそれらに助けられながら日本語を習得している訳である。

89年以降、自由化が進むチェコでは中等教育でも日本語が教えられることが多くなった。当然、大学でも日本語を第1外国語とする学習者が多くなることだろうが、彼らは今以上にあからさまにチェコ語的発想で日本語を話したり書いたりするのではないかと思われる。その際、チェコ語話者に特徴的な日本語の誤りの研究や日本語とチェコ語の対照研究がますます重要になるのではないだろうか。

#### 【参考文献】

- Alfonso, Anthony (1966) Japanese Language Pattern 上智大学  
千野栄一・千野ズデンカ (1975) 『チェコ語の入門』 白水社  
森田良行 (1985) 『誤用文の分析と研究』 明治書院  
—— (1988) 『基礎日本語辞典』 角川書店